

タイトル	送る言葉
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，39：11-12
発行日	2008-03-00

送る言葉

桑 原 俊 一

宝利尚一先生は2001年（平成13年）4月より本学人文学部英米文化学科に着任いただきました。メディア論や現代国際関係論、演習等多くの教科目をお持ちいただいてきました。先生は30年以上にわたり新聞記者として、とりわけパリを中心とするヨーロッパとカイロ時代の中東さらにアメリカのワシントンから時代を切り取る報道の分野でご活躍されてきました。その後、論説委員を経て本学本学部本学科に赴任されました。

先生のメディア論と現代国際関係論は常に多くの学生を惹きつけてきた学科目でした。第一線で活躍されてきた記者の眼で見てきた過去と現在のヨーロッパや中東そしてアメリカを新聞やテレビのニュースという媒体を通してリアルに時代を読み解く講義はたしかに魅力的であったに違いありません。なによりも体験と経験に裏打ちされた現代世界に対することばは、学生たちにたいし机上の学問では汲み取れない事象や疑問を掘り起す力を養うものであったと思います。学生たちによれば、先生の持たれる講義はいつも記者の眼で射抜かれたことばで溢れていたそうです。たしかに先生の研究室のデスクには新聞の切り抜きが山高く積まれていました。とても印象的だったことは、朝早く研究室を訪ねる度に、そこには新聞を片手に、もう一方の手にハサミを手にして新聞を切り抜いている先生がおられることでした。そしてありったけの笑顔を振りまきながら早口に話し始めるのです。芯から記者であり続ける先生を見る思いがいたしました。

先生の研究を鳥瞰すると、新聞・テレビを通してメディアや国際関係を検証する作業が中心であるといつてよいでしょう。近年の『人文論集』に寄せられた論文に「日本メディアのイラク戦争報道」（上・下）があります。記者の眼差しがふんだんに注がれた論考です。日本の有力メディア14社に

アンケート用紙を郵送し、回答を求め、他方で国際報道担当責任者に直接インタビューを行ない、その結果に基づき綿密な分析を施しておられます。分析の結果から明らかになったことは、日本のイラク戦争とその周縁で発生した事項について新聞、通信、テレビ・メディアの報道は決して満足がいくものではなかったと結論づけています。そして中東・イスラームの理解のためには、なによりも報道機関は速やかに記者の取材不足、人的不足、情報不足などを解消する必要があると指摘されています。つまり、中東・イスラーム専門記者の養成、そのためには取材のためのアラビア語学習の必要、さらにこの地域の歴史的背景を理解し、断続的に報道すること、そして戦争報道では欧米の通信社や有力新聞社の情報を多用することをやめること等を提言されています。

いずれも日本のメディア関係者に息の長い記者の養成を求めているものではありますが、石油の 90 パーセントを中東・イスラーム圏から輸入する日本としては当然のことですし、混迷を深めるこの地域の報道は危険を回避し欧米の通信社に依存することは現場重視の報道の原則に背くことになります。先生のご指摘や提言は尊重されてしかるべきでしょう。

人生 80 年を越える今、ご壮健で、これからもとりわけ中東・イスラームの理解のために、日本メディアのご意見番としてご活躍されることを祈念いたします。また本学学部のためにご貢献いただいた教育・研究そして諸委員会の活動にたいし衷心より感謝申し上げます。（英米文化学科教授）